Wuthering Heights の研究

― 憎しみについて ―

宮　川　下　枝

No Coward Soul is mine,
No trembler in the world's storm troubled sphere,
I see Heaven's glories shine,
And Faith shines equal, arming me from Fear.

〔エミリー ブロンテ 詩集〕
(The Complete Poems of Emily Jane Brontë)

臆病な魂は私のものではない。
世の嵐にもびくともせず,
天国の栄光の輝きを見る。
信仰も同じように導いてくれ,
私を恐怖から守ってくれる。

と大膽に自分の心境をうたった Emily Brontë が理想像として全霊をうちこんで彫り上げた hero は如何なる人物であるか, この度はその全貌を探らなければならない。姉 Charlotte Brontë でさえも妹の描いた Heathcliff という人物を到底理解することは出来ず *Wuthering Heights*（嵐ケ丘）の序文の中で

"Whether it is right or advisable to create beings like Heathcliff, I do not know. I scarcely think it is."

ヒースクリフのような人物を創造することが正しいことか, 賢明なことか私には分らない。とても正しいとも賢明とも思えないが,

と述べている程に, 不可解な人物ではあるが, このヒースクリフこそが, エミリー・ブロンテにとっては「自分の胸に宿る神」[1] に価する存在であって,

(1) "My great miseries in this world have been Heathcliff's miseries and I watched and felt each from the beginning, my great thought in living is

himself. If all are perished, and he remained, I should still continue to be; and if all else remained, and he were annihilated, the universe would turn to a mighty stranger; I should not seem a part of it."

〔*Wuthering Heights* Chapter IX〕

「ヒースクリフの不幸はわたしのこの世での大きな不幸よ。私はそれを一つ一つ見守り感じて来たわ。私の人生での思想は彼自身なの，もしもあらゆるものが滅亡してもヒースクリフさえ残れば私は存在し続ける。でも外のものが総べて残っても彼が消え去るなら，私にとって宇宙は他人よ，私はその一部分だってないのよ。」

ひさかたの天はまきさられ
あらがねの土はくづるとも
天土(アメツチ)はよしや変るとも
イエス君ぞ一人変りなき。〔讃美歌〕

キャサリンの胸のうちにあるヒースクリフえの思いは，キリスト教に於いて信者がイエス（絶対者）に対してもつ信仰と同じものが感じられる。

——決して姉の云うような粗末な仕上げではなく綿密な計画のもとに丹精こめて彫りこんだ像である。この gigantic statue を理解する為には，私は今回は当然の順序として彼の憎しみを追わねばならない。そしてその後に何故にエミリーがヒースクリフを理想の像としたのであるかに問を発し，それに答えてゆかねばならない。彼の憎悪が大半を占める後半の記述描写は善と悪が水と油のように判然としていて，その悪を描くには余りにも悽惨な身の縮むような書き振りであるだけに顔をそむけたくなり暫し読む手も休めたい程であるが，勇を鼓して読了しなければならない。世の中のものには何一つ動じることなく，自分の信念を表明出来る "No coward soul is mine." のエミリーであってこそ書き上げることの出来たものである。

無限の愛を追った前回の研究は楽しい労作であったが底深い憎しみを追う今回のは辛い苦しいものであった。だが読者である我々がそうであったとすれば，彼の憎悪を徹頭徹尾探求していこうとする作者自身にとっては更に苦しい仕事であったに違いないと想像する。彼女には善悪観はなかったとする学者[2]もいる。

[2] The conflict in her books is not between right and wrong.
(*A Wuthering Heights Handbook*)

が私はそうは考えない。終りに至って

"It's a long fight. oh, god, it is a long fight!"

〔*Wuthering Heights* Chapter XXXIII〕

と洩らすヒースクリフの嘆息こそは，「あゝ辛い苦しい仕事だった」という作者の安堵の嘆息ともとってよいと思うのである。

彼女は何故にかくも厳しい眼をもって彼の憎悪を堀り下げていかねばならなかったのだろうか。いゝ加減に事をすますことの出来ぬ彼女の徹底的な性格によるものであろうか。勿論それもあるであろう。計画にしろ構造にしろ文章にしろ実に徹底している彼女の性格は歴然として現われているが，この憎悪を扱ったことに関しては，それはそれなりに意味があり重大性のあることであろう。では憎悪とは一体何であるかを後半に於けるヒースクリフに焦点をあてつゝそのものの様想を分析して意味を考えてみたい。

今迄四回に旦る「嵐が丘」研究に於いて既に物語りの概略は述べて来たので今回は省略させて頂きたい。

主人公ヒースクリフは後半に於いては，

"Mr. Heathcliff, you are a cruel man."

〔*Wuthering Heights* Chapter XXVII〕

（ヒースクリフさん，あなたは残酷な人ですわ）

"in his eyes Heathcliff seemed a murderer."　〔Chapter XXI〕

（彼の眼には，ヒースクリフは殺人者にも見えました。）

"all his father's brutal conduct…."　〔Chapter XXXIII〕

（父の あらゆる 残忍な行為）

"that devil Heathcliff"　〔Chapter XXIX〕

（あの 悪魔の ヒースクリフ）

"You villian!"　〔Chapter XXVIII〕

"悪漢め"

"and is a most diabobical man."　〔Chapter XXI〕

「あの人は悪魔的な人だからね。」

と数々の痛烈な罵倒を受けており，彼自身自らも，

"You would imagine I was the devil himself." 〔Chapter XXVII〕

「お前は私を悪魔だと思っているのだろう」

と云っている通りの憎しみの固まり，悪魔のような人間である。彼の憎しみは恋仇の Edgar Linton, 小さい時から自分をいじめた主家の Hindley は勿論のこと，恋人の娘 Cathy, ヒンドレーの子息 Hareton, 自分自身の息子 Linton に迄及ぶ。少々場違いな憎しみであって当の本人よりはむしろ，その子供達に当り，第二世をいぢめて第一世えの報復を楽しむという見当違いのものであるが，このことの根本については私は次回の研究にまつことにしたい。この執念深い憎悪の情も人間の魂の奥底をのぞく時には却って当然の人間感情であって，平常は人間の理性によって包み隠されているだけであり，この虚飾を取り去った人間の姿を見ようとしたのがエミリーブロンテである。憎悪とは人間の心の中から無理に消すことの出来ぬ感情であることを彼女は知っていた。ではこの憎悪の情を奥深くから次々と引っ張り出してくる彼女の筆のあとを順々に追ってみよう。

(a) 息子リントンに対するもの——

"I despise him for himself, and hate him for the memories he revives!"

〔Chapter XX〕

「おれはあの子自身を 軽蔑するし，あいつのもつ思い出の為に もっと 憎らしいんだ。」

彼は自分の息子リントンを評してこのような暴言を吐く。だがこの暴言も静かに考えてみれば納得出来るものかも知れない。彼のような逞しい人間にとっては，リントンのような病弱で気魄(ハク)もない子供は，とても自分の肌に合うものでない。これは，エミリー自身の感情がむき出しに現われているようで面白い。臆病な魂は自分のものではないと云う彼女にとっては，勇気のない人間は到底(トウテイ)相容れないものであろう。他人であろうと自分の子供であろうと関係ない。彼女の愛でるのは唯勇気ある魂だけであるのだから，当然の感情であろう。又もっと興味ある点は両親のもつ感情の一般的な弱点を突いていることである。一体，親というものは過分の期待を子供にかけたがるものであるから，たとえ子供の出来が上等であってもなお不満に思えるのは自然の成りゆきであるから，ましてやその子供が自分の理想に遠くかけ離れている場合には，非常な焦燥を覚え，幾分憎しみ迄を感じるのは否めない事実である。エミリーの筆は極端に走るので，ともすれば奇異な感じを受けるが，これは，あらゆる人にとって共通の

感情である。エミリーは，私共が気付かずに見過してしまいそうな感情を，敏捷に認め，楔を打ち込んでいく。鋭敏な彼女には，それは人の中にあるものというより寧ろ自分の心の奥深くに認めたもので，それをそ知らぬ顔で過す気持にはなれなかったのだろう。

更にこのヒースクリフのリントンに対する腹立ちの中には，妻イザベラに対する憎悪がこもっていてなかなか複雑な感情が構成されている。恋仇に対する憎しみと，復讐の為にだけエドガーの妹をうまく連れ出して結婚した彼には妻イザベラに対しては一片の愛情さえなかった。 David Cecil も「愛情深い両親の間に生れた子供は善良なる Hareton であり，憎しみ合った Heathcliff と Isabella の間には立派な子供が出来なかったのだ等と大変興味深い意見を述べているが，とにかくリントンに対してはヒースクリフは愛情を持ち得ないでいる。彼の顔を見て思い出すのはイザベラであるので彼にはたまらぬ思いがする。だが

"We know that!" answered Heathcliff, "but his life is not worth a farthing, and I won't spend a farthing on him."

〔Chapter XXX〕

（あいつのいのちなんて一文の価値(ねうち)もない，あいつの為には一文だって使いたくない。）との彼の感情はけち(ケチ)すぎるし，

"and let me never hear a word more about him! None here care what becomes of him; if you do, act the nurse; if you do not, lock him and leave."　〔ibid〕

あいつのことは一言もおれに聞かさんでくれ。こゝに居る者は皆あいつがどうなろうと気にはしない。もしお前が気になるなら看護をするし，それでなければ鍵をかけて放っておくさ。」

に至っては，常識では理解出来ない憎悪であり残酷さであって，流石のエミリーもネリーをして

"I could not picture a father treating a dying child as tyranically and wickedly as....　〔Chapter XXV〕

「まさか死にかゝっているわが子を，そんな無茶なひどい目に遭わせる親があろうとは私も思わなかったのです。」

と慨嘆させている。

(b)　甥ヘヤトンに対するもの——

"He has satisfied my expectations. If he were a born fool, I should not enjoy half so much. But he is no fool, and I can sympathise with all his feelings, having felt them myself. 〔Chapter XXI〕

「あいつは私の期待を満足させてくれる。もしあいつが生れつきの馬鹿だったら，わしは今の半分も面白くないだろうが，あいつは馬鹿ぢゃないから辛さもよく分るのだから，わし自身辛かっただけにあいつの苦しみも分って楽しみなんだ。」

何処からとも知れずアーンショー氏によって「嵐が丘」に連れて来られ，主人の死後は酷使されて成長したヒースクリフは，ヒンドレー亡きあとのヘヤトンの境遇が自分の少年時代と全く同じであることはよく心得えている。彼の悲しみ，苦しみ，くやしさはよく理解出来るのだから同情してやるのが当然の待遇であると考えられる処であるが，ヒースクリフの真の姿はそんな生やさしいものではない。「この子は頭がいゝだけに，苦しみも人一倍感じるのである。」と，いぢめるだけ楽しみがあると，一人悦に入っているヒースクリフは，矢張りこのヘヤトンを苦しめることによって，その父ヒンドレーえの報復を全うする。ヘヤトンがまだ幼い頃偶然にもこの少年を救い助けたのがヘヤトンであると分った時ヒンドレーへのくやしさはまざまざと現れていて，既に早くから彼に巣喰っていた感情である。

"It's a pity he cannot kill himself with a drink." observed Heathcliff. 〔Chapter IX〕

「酒で体が駄目になって死んでしまえないのは，可哀そうなこと」とヒンドレーに対して口惜しがり

It expressed plainer than words could do, the intense anguish at having made himself the instrument of thrawing his own revenge. 〔Chapter IX〕

自分の果たそうとする復讐に自分自ら邪魔に入ったという忌わしさが言葉よりもはっきりと現れていました。とネリーも彼のことを云い，

"delighting to wrong and ruin those he hates, if they give him the slightest opportunity." 〔Chapter XXI〕

あの人は自分の嫌いな人たちを，少しでも機会があれば仇して，破滅させて喜ぶ……」

とエドガー・リントンも彼を評している。

(c) Cathy に対するもの——

このヒースクリフの憎悪も，キャシイに至っては極限に達してしまう。あらゆる憎悪の中でも彼女に対するものが一番激しいものであろう。恋仇エドガー・リントンに対する憎しみとキャシイを憎むことによって晴していく場違いの方向に進展するヒースクリフのいき方がこゝでは最も顕著に現れている。

"I shall enjoy myself remarkablly in thinking your father will be miserable, I shall not sleep for satisfaction.　〔Chapter XXVII〕

「お前のお父さんが悲しがっていると思うのは私にとって実に痛快だ，嬉しくてとても眠れない。」

と，手を叩いて喜んでいるのはまさにその実証である。愛するキャサリンを奪いとったエドガーを苦しめる為には，娘を連れ出して父に娘と引き離される淋しさを味わせなければならない。又更に大きな終極的なもくろみとして，Thrushcross Grange と Wuthering Heights にある両家を統合してうまく自分がその財産をのっとり，両家を破滅させることであるから，無理矢理にもキャシイをリントンと結婚させねばならない。目的の為には手段を選ばない彼は，キャシイが嵐が丘に自然に足のむく日を何年も気長に待ちいよいよ待望の日が到来するや，下にもおかぬ機嫌のとり方で彼女をとりこにする。幾度か彼女を嵐が丘におびき寄せた後，ネリーとキャシイを別々の部屋に閉じこめ四日五晩の末，遂に二人に事実上の結婚をさせる。既に父エドガーは病気も重り明日を知れぬ命であるという危険な時期であるだけに，命令に従わねば帰して呉れぬヒースクリフにキャシイは

"I defy you to frighten me."　〔Chapter XXIX〕

「私をおどしても駄目よ」と挑戦する。

"I should treat myself to a slow vivisection of those two."

〔Chapter XXVII〕

法律に触れなければ，二人を八つ裂きにしてしまいたい程のヒースクリフだ。

何とか閉じこめられた家を遁れ出て辛うじて父の死の直前に間に合ったキャシイはその父の死の悲しみを生家でゆっくりと癒やす暇もなく早々にヒースクリフに引き立てられてハイツに戻される。結婚させられたものゝ，夫リントンは既に体力も消耗し床に臥ったまゝ寒い部屋に置き去りにされている。花嫁であるキャシイもそこに一緒に放り込まれたまゝ火もない部屋で看護をし果しては夫の死を見守らねばならぬ。その後も睨み合った状態のまゝ敵どうしとしてヒースクリフと同じ屋根の下に日を過

さねばならなかった。嫉妬から来ていたヒースクリフの憎悪もキャサリンの敵意に溢れる眼を受けて怒りのかたまりとなって爆発する。

"Keep your efts fingers off, and move, or I'll kick you! cried Heathcliff, brutally repulsing her ... I detest you! 〔Chapter XXVII〕

「指をお離し，そしてどけ，でないと殴り倒すぞ。お前なんか大嫌いだ。とヒースクリフは残忍に彼女をおしのける。

She refused and struck her down, and wrenched it off the chain, and crushed it with his foot. 〔Chapter XXVII〕

キャシイの胸にかけていたロケットをもぎ取ると，床の上に投げつけ足でふみつぶしてしまった。その胸のロケットの中にあるものはキャサリンの写真だったのであるから憎むべき娘の胸に愛する人の写真のあることは彼には我慢出来ないことだった。

her mouth filling with blood.

打擲(チョウチヤク)された後の彼女の口には血が一杯たまる。だがこの位でヒースクリフの憎悪が治るものではない。恋仇の娘であったキャシイは今は更に嫁と舅という複雑な関係になって生きいる以上利害関係は一致しない。嫁は花を植えるのだから少しの土地を借してくれと云う。俺の土地は一切使うことはならぬという彼に対して

"You shouldn't grudge a few yard of earth, for me to ornament, when you have taken all my land!" 〔Chapter XXXIII〕

「私の土地を全部取っておきながら，あなたは僅か数ヤードの土地も貸し惜しんで。」

とキャシイはピシャリとやりこめるが，これに激怒した彼は "I'll kill her." 殺してしまいたい迄の衝動(ショウ)にかられる。

He had his hand in her hair; Hareton attempted to release the locks, entreating him not to hurt her that once. His black eyes flashed, he seemed ready to tear Catherine in pieces and I was just worked up to risk coming to rescue. 〔Chapter XXXIII〕

ヒースクリフは彼女の髪の毛を摑むと，眼は充血しまさにその体を八ツ裂きにしても足りぬ程の形相にネリーはとんで間に入らねばならなかった。突然手を放すが

"You must learn to avoid putting me in a passion, or I shall really murder you." 〔Chapter XXXIII〕

「私を怒らせないようにしないと殺してしまうぞ。」「今度は本当に殺してしまうぞ。」と凄い眼幕である。

この殺害の一歩手前で踏み止ったぎりぎり一杯のキャシイえの憎悪，又前述のヘヤトン，リントンに対するものは総べて子供に体当りの憎悪をぶっつけてその親えの怨みを晴らすという，当の本人にぶつかって行くものでない非常に見当違いの感情の吐き出し方は一体何に原因があるのであろうか。弱いものいぢめの感情であろうか。屢々エミリーの比喩の中にもこうした例が出て来るが，

he possessed the power to depart, as much as a cat possesses the power to leave a mouse half killed, or a bird half eaten.　〔Chapter VIII〕

猫が半殺しのねずみや半分食べかけの小鳥を残して去ることが出来ないように，少年にも去る勇気はありませんでした。

弱いものいぢめで喜ぶ masochism の一種と考えていゝのかも知れない。又彼の中には力に対する願望，力慾とも云うべき power desire があるのだという考えも成立する。或いは又 superiority complex（優越感）と云うべきものであるかも知れぬ。古い作品の中に現れる人物にその源泉を辿り比較研究などして，とっくり調べてみたいと思っている。ヒースクリフの最後の告白の中にも working like Hercules ハーキュリーズのようにとある。ギリシヤ神話の中の人物の快腕に真似たものであろう。

以上のように，エミリー・ブロンテは克明に憎悪を描いて来た。勿論ヒースクリフのような人物が実存するわけではない。写実的な描写でなく，エミリーの心の中にある人間像であるから皮相的な読み方では理解し難い点が多い。

彼女は表面に現われた人間だけに眼を止めずその奥深くに意識的に或いは無意識的に存在するものを透視している。潜在するものを引き出して描こうとする余り，筆は凄みを帯び嵐が丘に吹きあれる嵐のように激しいヒースクリフの怒り，憎しみは音をたてゝ荒れ狂うのであるが，ありのまゝに表明するのは，芸術家，及び文学者の仕事である。

そこまで追求しなければ納らぬ彼女の胸のうちは唯徹底的にものを処理したいという潔癖だけではなく，人間の心の中に否自分の中に巣喰う悪を見つめる時赤裸々に表明せずには居られなかったのである。

豊田豊博士は無限に憎しみ得る者だけが無限に愛することが出来るのであるとの解釈をし，[3] 愛と憎しみは表裏一体のものであり積極的にはこの小説は無限の愛と無限の憎との結合である」

と述べている。

彼女の作品が愛だけを取り扱っているものであったら，その偉大さも半分にも達さなかったであろう。両面のよろしきを心得ることを，フロイドは両面価値性，又は二元性なる言葉で呼んでいる。爾来人間の本質に基く両面性を取り扱った小説はスチーブンソンの「ジキル博士とハイド氏」を始めとして数多くのものがあり，バージニア，ウルフのダロエ夫人等に至っては斬新な扱い方であるが，社会小説を書くことに忙しかった十九世紀の文学会に於いて早くも人間の内面性に注目したことは彼女を先駆者と呼んでも過言ではあるまい。善だけの人間を完成しようとしなかった処に，彼女の偉大さがある。

彼女は外界との接触を断ち深く自身に閉じこもっての生活を続けていたのであるからその累積した感情は，思想は一度筆をとるや堰を切ったように止めどもなく流れ出た文勢がうかゞえる。

My mind is so eternally secluded in itself, it is tempting, at last, to turn it out to another. 〔Chapter XXXIII〕

「わしの心は余りにもずっと自分の中に閉じこもっていたので，とうとう誰かに打ち明けずには居られなくなってしまった。」

というヒースクリフの言葉そのまゝである。彼女は説教者ではないから批判はしていない。

(d) 冷酷さ

唯私が非常に興味を感じるのは，この冷酷さについてゞある。彼の憎悪は残忍，冷酷な行為となって現れているが，この冷酷さには特別の意味があるように感じる。一体エミリーの作品に出て来る人物は実に冷い態度をとることが屢々あるが，今はヒースクリフを扱っているのであるからヒースクリフだけに止めておこう。

前述した通り彼は自分の息子の死に際しても医者を呼ぶことさえしない。キャシイとの結婚がすんだのであるから彼の目的は完遂出来たからとて，唯リントンの死を待

(3) 「嵐が丘」　研究社　序文

っているような態度は余りにも冷酷な気がするが，だがふりかえって作者のことを考えてみよう。姉シャーロットも云う如く，エミリーの魂は肉体に対して残酷だった。on herself she had no pity. (Biographical Notes of EIIis and Acton Bell) のであって，彼女自身最後迄家族の心配をふり切って医者の診察を拒んでいる。死の直前迄も医者に頼ろうとしない彼女は常に自分に厳しい態度を固持した人だった。Stronger than a man. (ibid) の彼女にして始めて描くことの出来るもので冷酷さの中には自分に打ち勝とうとする強さが又自分えの厳しさがうかゞえる。こうした念を以って読み直せば彼の冷酷さの中には，湧き上る凱歌さえもきこえて来るように思われる。

だがこれだけで充分であろうか。只人間の両面性を凝視するだけでは足りないであろう。ごまかすことなく，愛と憎しみの姿を見つめる時只それだけで満足してはいられない。彼女の作品は決して，こゝで完結してはいないのである。では，何故に彼女が「ヒースクリフを理想の像としたか」との最初の問に戻りたい。彼女のそれに対する解答は，終り二つの章にあるのだと思う。人間の姿を見つめた後の彼女は如何に物語りの筋を進めているかに考えを及していきたい。話の順序からすれば当然ヒースクリフの復讐が達成される段回に至ると思われる処である。復讐の一念に燃え悪鬼となり変り，冷静，周到なる計画準備のもとに両旧家を統合出来る過程に達したヒースクリフである。何年間もの辛抱強い苦労の末，今や総べての膳立は揃いあらゆる実権を有した今，彼は掌中に納めた二羽の小鳥を一捻りすればよいだけである。

だが果して彼はその長年の目標であった復讐を完遂したであろうか。物語は一篇のクライマックスに達する。

(e) 昇華

その両家を代表する二羽の小鳥はヘヤトンとキャシイであるが，若い二人に憎しみの眼を向け続けて来たヒースクリフが二人の眼の中に突然キャサリン，アーンショーにそっくりのものを見出すと，

this resemblance disarmed Mr. Heathcliff　〔Chapter XXXIII〕

急に心が和らげられて来る。特に，新しい愛情に活々としているヘヤトンを見るとヒースクリフの心は altered its character…変ってくる。

"It is a poor conclusion, is it not?" he observed, having brooded a while on the scene he had just witnessed; "an absurd termination to my violent exertions?" 〔Chapter XXXIII〕

「情ない結論ぢゃないか。えゝ？　大変な無理をしたあげくの果がこんな馬鹿げたことになろうとはね」と二人の立ち去るのを見送ったヒースクリフはネリーに向って嘆息する，以下彼の慨嘆に耳を傾けよう。

"I get levers and mattocks to demolish the two houses, and train myself to be capable of working like Hercules. and when everything is ready and in my power, I find the will to lift a slate off either roof has vanished!

〔Chapter XXXIII〕

両家を破壊する為に挺子(てこ)もつるはしも手に入れたし，ハーキュリーズのようにそれを使えるように鍛練もした。そしていよいよ用意万端整い，すべてが彼の力のもとにおかれた時，どちらの家からも屋根瓦一枚もはがそうという意志がなくなってしまった。——こゝが重要な点でありエミリーの一番強調したい点であると思う。——

"My old enemies have not beaten me, now would be the precise time to revenge myself on their representatives; I could do it; and none could hinder me. But where is the use? I don't care for striking; I can't take the trouble to raise my hand." 〔Ibid〕

旧敵どもには彼は負けなかった。奴らの子供達に復讐を果すべき絶好の時であって何者も妨げることのない今こそ果せる時であるのに，彼は急にやる気がなくなってしまう。打つ気もなくなるし，手を振り上げることさえ面倒くさくなってしまう。

"That sounds as if I had been labouring the whole time, only to exhibit a fine trait of magnanimity. I have lost the faculty of enjoying their destruction, and I am too idle to destroy for nothing." 〔Ibid〕

如何にも寛容という立派な徳を示したいばっかりに，一生懸命あくせくと努力したように思われるがそれとは大ちがいで彼らを破滅させて喜ぶ能力が彼の中には失くなってしまっている。何の喜びもなしにたゞ破壊をするには，不精すぎる。

復讐の無意味さを悟るとは偉大なことではないか。前半の終に於いてキャサリンえの愛の大告白をするあのヒースクリフの台詞と相俟って実に素晴しい大台詞である。その荘重なる語調，力強い語気，読むものゝ胸打つものがある。 a strange change

この心の変革を彼はこういう言葉で呼ぶ。一番重要な瞬間である。一生をかけてこの瞬間の為に苦労する人もある如くヒースクリフにとっても長い道程であった。猛り狂った復讐心も消えた。まさに strange change（不思議な変革）である。人を寛容に許すことが出来る気持になった時こそが憎悪も昇華された瞬間である。

Everlasting no から everlasting yea [4] に至る道である。

Milton の "Paradise Lost" にも似てこの作品が世界最大作品の一つとあげられる理由もこゝにあるのではないか。それもヒースクリフの情熱によって打ち勝つことの出来たものである。彼がこの悪魔性を見事に打ち砕くことが出来た時，彼の hideous（いまわしい） demon incarnate（悪魔の化身の）の存在も許容される。人間の両面性を見極めようとするエミリーはこの変化を人間性の進歩発展とは考えていないとの説[5]もあるが，第三者の側から考える時ヒースクリフを偉大な像として掲げる理由はここにあるのである。

almost beautiful with its, blooming bells and balmy fragrance grows faithfully close to the giants foot.　〔*Wuthering Heighls* 序文〕

「巨人の足もとには釣鐘花が花開き芳香が漂え美しい迄である」

と讃える姉シャーロットの言もここに於いて生きてくる。

もっと最大の最上の讃辞が欲しい処である。ネリーに総べてを打ち明けた後は不思議とすがすがしい心になり，

my immortal love　　彼の不滅の愛

my wild endeavours to hold my right

当然の自分のものであるべきものを保持しようとする狂しい迄の努力

my degradation　　その為の自分の随落，

my pride　　空しい誇り，

my happiness　　幸福とは何であったか

my anguish　　空しい幸福の追究えの苦悶

これ迄の自分の姿にしみじみと眼をやり，その空しい様を Hareton の中に見出したというのは彼が始めて自分を離れ自分を客観的に見ることが出来た時である。秘めた

---

(4) Carlyle : *Sartor Resurtus*

(5) *A Wuthering Heights Handbook*

思いを吐露すると彼はすっかり安心して

render me regardless how he and his cousin go on together. I can give them no attention. 〔Chapter XXXIII〕

ヘヤトンとキャシイの間の新しい愛情をも認め，他人を寛く受け入れる気持になれる。こうして彼が昇華し尽された時始めて，彼は純粋な気持になり，キャサリンの幻を追い求め，愛の完成を願う気持となる。たとえそこに待ち構えているものが死であろうと既に，この不思議な心境に達した彼には，心に溢れるものは彼女の姿のみであって死の恐怖も何もない。

"I am surrounded with her image!" 〔Chapter XXXIII〕

ネリーにはこの不思議な変化というものがよくのみこめない。外面的なことしか見ることの出来ぬ彼女には，病気らしくもないしと訝かるが，

I have to remind myself to breathe — almost to remind my heart to beat! 〔Chapter XXXIII〕

と息をするのにも思い出さねば忘れてしまう程，自分の脈博さえも忘れている状態で彼は完全に生きようとする努力を忘れた恍惚状態となっている。

昇華されきった状態を示す為の文章であろう。

"It is a long fight! Oh, God, it is a long fight!" 〔Chapter XXXIII〕

彼の嘆息と共にエミリーの安堵の嘆息をもきゝ乍ら David Cecil の文を以って彼女の勇気を讃えてこの論文を終りたい。

There is nothing cloistered about her imagination. It roves over the world as fearless and unconfined as the young eagle, and it has the young eagle's unspoilt, unhesitating zestful responsiveness to life.

〔*A Wuthering Heights Handbook*〕

繊弱な肉体と強烈な意志感情の所有者であった矛盾に満ちたエミリー・ブロンテは又若鷲のような奔放な想像力の所有者でもあった。

現代も闘争に明け暮れている時代であるが，こゝに於いても先づ解決されなければならないのは人間の憎であることを思う時，早くもこの人間の本質の問題にかくも情

熱をもって取り組んで行ったエミリー・ブロンテに最大の讃辞を捧げるものであります。

文　　献

Text Book:

Wuthering Heights — Emily Brontë
The Modern Library: New York

Wuthering Heights — The World's Classics

Wuthering Heights — 研　究　社

参　考　書

The Three Brontes : Sinclair — Kennikat Press

The Genesis of Wuihering Heights
Mary Visick — Hong Kong University Press

The Brontës : Phyllis Bentley — Arthur Barker Limited

A Wuthering Heights Handbook — Lettis and Morris